２０１５年度　活動報告書　安藤泰彦　（教授）

１　大垣ロボットプロジェクト(Ogaki Robot Project)
—情報学基礎での授業実践　（小林 孝浩、 山田 晃嗣との共同担当）

【概要】
情報学基礎の授業において、制御プログラム(Choregraphe） によりヒト型ロボット(Pepper／Nao）を制御し、最終的に公共空間で実機を設置・動作させることを試みた。
【参加対象】　大学院1年学生
【授業期間】
4月28日から6月10日にかけて授業時間を設定
【発表実施日時】
6月2日、4日、5日
【実施場所】
ソフトピアセンタービル各所、大垣駅自由通路、スイトピア、大垣市内商店数カ所、他

※→　詳細は別紙報告書「RobotProject2015」に記載

2　「OVER THE IAMAS #4~#5」の開催

【概要】
昨年度（2014年）から京都の「ギャラリー16」開催されている、IAMAS卒業生による作品展示企画「OVER THE IAMAS」。今年度は三名の卒業生による展示が開催された。
【参加対象】　2013年度卒業生（山田聡、内田聖良、三宅由里子）
【開催期間】　2015 年6 月23 日（火）～ 7 月5 日（日）
【開催場所】　ギャラリー16（京都）

※→　詳細はATPプロジェクト報告書に記載

2　作品展示：BEACON 2015
—岐阜県美術館でのアーティストファイル#3の開催

【概要】
2013年より岐阜県美術館との連携企画による「アーティストファイル」が開催されてきた。
三回目となる今回は、私が担当し、コラボレーションによる作品「BEACON 2015」を展示した。
【開催日時】2015年9月10日～10月12日
【開催場所】岐阜県美術館

※→　詳細は後述「BEACON 2015 活動報告書」記載

3　iamasOSでの学生企画展示「IAMAS WORKS」のサポート

【概要】昨年度(2114）に引き続き、大垣市より、大垣商店街内のフリースペース「iamasOS」での展示依頼を受け、学生による企画展示を開催した。
【参加対象】ATPプロジェクト学生が中心となり企画運営
【開催日時】2015 年11月1日(日)ー29日(日)
【開催場所】大垣商店街内のギャラリースペース「IAMAS OS 3.0.1」(岐阜県大垣市東外側町2-9)

※→　詳細はATPプロジェクト報告書に記載

4　大垣駅・光プロジェクト 2015
—メディア・サイト研究会での実践　（小林 孝浩、 平林真美　との共同担当）

【概要】
　昨年度（2014年）に引き続き、大垣市より依頼を受け、大垣駅自由通路の展示・イベントを企画・実施した。
【開催日時】2015 年12 月11 日（金）～ 12 月13 日（日）

【開催場所】大垣駅自由通路

※→詳細は別紙報告書「光プロジェクト2015報告書」添付

5　岐阜おおがきビエンナーレ2015の開催

【概要】「岐阜おおがきビエンナーレ2015」の企画・運営と実施
【場所】ソフトピア・センタービル・ソピアホール
【日時】2015年12月19日(土)~23日(水・祝)　（18日：前夜祭）

※→　詳細は別紙報告書「biennale2015」添付

6　その他

・「清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 2017」企画委員
　　岐阜県主催「清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 2017」の企画内容・募集要項などの策定

大垣ロボットプロジェクト(Ogaki Robot Project)
—情報学基礎での授業実践　（小林 孝浩、 山田 晃嗣　との共同担当）

【概要】
情報学基礎の授業において、制御プログラム(Choregraphe） によりヒト型ロボット(Pepper／Nao）を制御し、最終的に公共空間で実機を設置・動作させることを試みた。

【学習の視点】
１）プログラム作成の基礎を学び、試行と実装の流れを体験する。（＜情報工学的観点）
２）ロボットがどのような場で、人とどう関わるのかを考える。（＜応用情報学的観点）
・現場でのロボットの動作を観察・分析して、問題点をさぐる。
３）ロボットとは何か、ロボットからヒトのありよう（存在様式）を考える（基礎情報学的観点）

【日時】
4月28日から6月10日にかけて授業時間を設定

【授業日程】
［第一期］　4/28〜5/6
・情報学基礎での前提概念の整理
・今回のプロジェクトの概要
・各自フィールドとロボット動作の企画案作成
①情報学基礎概論（情報学とは、ロボットとは）
②課題の提示（課題説明　設置場所　フィールド選定　ペッパーの説明）
③フィールドリサーチ　ロボットの動作の検討
④企画案の発表と意見交換

［第二期］ 5/ 7〜6/10
・プログラムの作成と試行
①シュミレーションプログラムを作成
②プログラムを実装し実装チェック

［第三期］　5/25〜6/10
・具体的に所定の場所で動作させ、記録し、発表する。

【協力】
■ロボット貸出などの協力
株式会社サイエンスネット、公益財団法人ソフトピアジャパン、アビダルマ株式会社
■実施場所協力
大垣市市街地整備課、スイトピアセンター、ソフトピア・センタービル指定管理者、デンパ堂、餅惣、三輪酒造、ソフトピア・ショップ・ピア

【成果と反省】

１）今回の課題には、①プログラム実装などのテクニカル面　②学生個々が独自の企画を考えるというコンセプト面　③関係者との折衝など企画実現面、など多様な側面が含まれており、学生の負担はかなり大きかった。しかし、最終発表では、単に人の役に立つロボットという観点だけでない、様々な展開がみられた。

２）学生・教員共に、ロボットプログラムを１から習得し、試行錯誤を重ねながら、動作実演をした。pepperの納品が遅れ、naoの借入、pepperの借入など必要となり、実機での動作実験が遅れたことは残念であった。また、公共の場での実演は、いくつかの区域（ソフトピア、自由通路、スイトピア、商店街など）を一度リサーチした後に、学生個々が選んでいる。しかし、スケジュールの都合上、日時や時間帯は自由に選ぶことができず、人の集まりなどの面で、難しい面もあった。しかし以上のような困難さやハードルは、今回のようなプロジェクト的な授業実践の面白さでもあり、本学ならではの取り組みであったように思われる。

【考察と実演の分類】

ヒト型ロボットを授業に応用する観点はいくつかあると思われる。学習の視点でも書いたように、プログラムや機械制御の情報学習の基礎としてロボットを使用するということが、まず考えられるものである。
特に、プログラムのアウトプットが、文字・画像出力が中心ではなく、ロボットからの音声出力や動作といった人の応答に近いものであり、またインプットもまた、ロボットの視覚・聴覚・触覚へのアクセスとなることで、生活空間との関わりを考えながらのプログラミングには適していると思われる。

しかし特に、今回の授業（プロジェクト）では、ヒト型ロボットを「人-ロボット」の関わりを考えるための素材にするというねらいがあり、狭義の情報学習に収まらない学生個々の問題提起力や想像力の広がりを求めた。
学生の最終発表では様々な取り組みが見られたが、
それらを実施場所や対象とする相手（観客）に応じて以下のように分類して列挙する。

１　路上パフォーマンス＃１
　　—人と積極的に関わるロボット
公共の通路など、人が往来する公共の場所での実演であり不特定の通行人を対象とする。その中で、特に人に話しかけるなど人との会話を通して、人-ロボット間の交流をめざすもの。

２　路上パフォーマンス＃２
　　—演技するロボット

上記１と同様、公共の通路などで、不特定の通行人を対象とするが、ある特殊な役柄をロボットに与え、演技することを主とするもの。
琵琶法師、演説する政治家、地蔵、鉄道好きの少年などである。

３　店頭・公共施設パフォーマンス

店頭や科学館などの特定の目的を持った場所でのパフォーマンス。それぞれの場所に応じた目的をもって来店・来館する人を対象にする。

４　演劇・映像作品でのパフォーマンス
　　—物語の中のロボット

上記の２と同様に、ロボットに特定の役柄が与えられ演技するが、
演技の場所が、演劇空間や映画のフレーム内にあり、
演劇や映画などの物語空間内のキャラクターとして設定されるもの。

１　路上パフォーマンス＃１
ー人と積極的に関わるロボット

プリクラ小僧NAO
【場所】大垣駅南北連絡通路
【機種】nao
【形態】公共空間（路上）パフォーマンス
【特徴】一緒に写真に写ることの呼びかけ

ナンパするPepper
【場所】大垣駅南北連絡通路
【機種】pepper
【形態】公共空間（路上）パフォーマンス
【特徴】女子高生への声かけ

Free hug beyond the species
【場所】 SJC 1F、 大垣駅南北自由通路
【機種】Pepper
【形態】公共空間（路上）パフォーマンス
【特徴】ハグするロボット

あなたは・・・2015

【場所】大垣駅南北連絡通路、SJC 1F（ロケ地）

【機種】Pepper

【形態】映像作品

【特徴】アンケートをとるロボット

ナオのクイズ

【場所】SJC1 階

【機種】Nao

【形態】公共施設パフォーマンス

【特徴】クイズで人と関わるロボット

２　路上パフォーマンス＃２
演技するロボット

琵琶法師 Pepper

【場所】大垣市高屋町交差点地下道

【機種】Pepper

【形態】公共空間（路上）パフォーマンス

【特徴】琵琶法師として謡うロボット

ロボ党　なお

【場所】大垣市内　新大橋（通称： 三角公園）

【機種】Nao

【形態】公共空間（路上）パフォーマンス

【特徴】演説するロボット

鉄道少年ペッパー

【場所】大垣駅南北連絡通路

【機種】Pepper

【形態】公共空間（路上）パフォーマンス

【特徴】鉄道案内をするロボット

ロボットのための地蔵

【場所】 SJC 1F

【機種】Nao

【形態】公共施設パフォーマンス

【特徴】地蔵としてのロボット

小型ロボット、望遠鏡を覗く

【場所】SJC 13F

【機種】nao

【形態】公共施設パフォーマンス

【特徴】機械装置であるロボットが別のテクノロジー装置である望遠鏡を覗く面白さ

3　店頭・公共施設パフォーマンス

ペッパーとお酒を飲みませんか？

【場所】SJC１F／芭蕉庵（むすびの地記念館内）

【機種】pepper

【形態】店頭パフォーマンス

【特徴】

酒に酔ったペッパーによる店舗デモンストレーション

演歌の女王ペッパー亜紀が電波堂に来た

【場所】大垣商店街「デンパドウ」 店頭

【機種】pepper

【形態】店頭パフォーマンス

【特徴】演歌を歌うロボット

おもち屋さんと常連なおくん

【場所】大垣商店街「餅惣」店内

【機種】nao

【形態】店頭パフォーマンス

【特徴】店員ではなく客としてのロボット

ペットショップのNao

【場所】 SJC 1F ショップ・ピア

【機種】Nao

【形態】店頭パフォーマンス

【特徴】ペットとしてのロボット

ロボットカルタ

【場所】大垣市スイトピアセンター

【機種】Nao

【形態】公共施設パフォーマンス

【特徴】ゲームを主導するロボット

4　演劇・映像作品でのパフォーマンス
―物語の中のロボット

ロボット演劇 ～演者nao の一人芝居～

【場所】 SJC ギャラリー
【機種】Nao
【形態】演劇パフォーマンス
【特徴】一人演劇

スマート人形

【場所】SJC ギャラリー
【機種】Nao+人
【形態】演劇パフォーマンス
【特徴】人と関わるロボット

ささやかな幸せを

【場所】ソフトピア地区、ゴミ集積所
【機種】nao+人
【形態】演劇パフォーマンス
【特徴】廃棄されたロボットと人の関わり

変身

【場所】大垣市内　新大橋（通称： 三角公園）
【機種】Nao
【形態】演劇パフォーマンス
【特徴】子ども像と語り合うロボット

想ひ出

【場所】大垣商店街路地（ロケ地）
【機種】Nao
【形態】映像作品
【特徴】ロボットを主人公にした映像作品

(あなたは・・・2015)

【場所】大垣駅南北連絡通路、SJC 1F（ロケ地）
【機種】Pepper
【形態】映像作品
【特徴】アンケートをとるロボット

アーティストファイル#3　「BEACON 2015」　活動報告書（安藤）

【概要】
2013年より岐阜県美術館との連携企画による「アーティストファイル」が開催されてきた。
三回目となる今回は、私（安藤）が担当し、コラボレーションによる、メディア／映像インスタレーション作品「BEACON 2015」を展示した。
【開催日時】2015年9月10日～10月12日
【開催場所】岐阜県美術館
【制作メンバー】　Beaconプロジェクトチーム　—伊藤高志、稲垣貴士、吉岡洋、小杉美穂子、安藤泰彦
協力：廣瀬周二、市野昌宏（メディア・オブジェ）

1　展示概要

広報関連
ちらし（A4）の配布（資料添付）
WEBの作成（http://www.iamas.ac.jp/af/03/）
美術館正面にサインを設置（写真１）

写真１　美術館入り口看板

作品全体概要
展示会場全体を３パートに分け、第一室「見上げる人」、第二室「プロペラ」、第三室「BEACON」とし、順路に従った鑑賞形態をとった。（図1）
また美術館通路から展示会場に観客を導く導入部分として、会場入り口付近に７体の「リレーショナル・ポッド」（廣瀬・市野制作）を設置した。

リレーショナル・ポッド
それぞれがインタラクティブな点滅反応をすると共に、点滅の連鎖反応を起こす７体のスチール製ポッド、ポッド表面に、「BEACON　2015」の映像撮影場所を今回の撮影場所を提示する。（写真２）

写真２　リレーショナル・ポッド

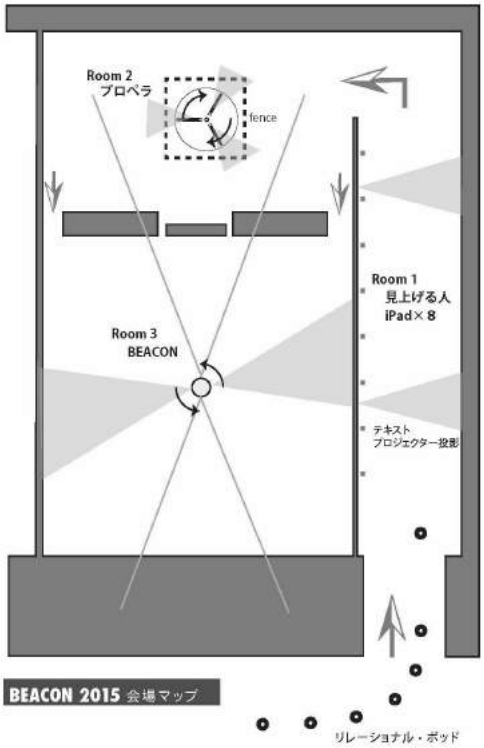


図１　会場マップ

２　BEACON 2015　作品概要

第一室　見上げる人

８台のiPadを壁面に設置。各iPadに10名、計80名の地域や世代の異なる人が空を見上げる映像（約100秒）をループ上映。（写真３）　対面の壁面に、２台のプロジェクターで、短いテキストをループ提示。（写真４）

写真３　見上げる人　８台のiPad

写真４　見上げる人　テキスト・プロジェクション

第二室　プロペラ

第一室の日常的な雰囲気から一転して、第二室は揺れ動く光と影による不安な状況を観客に体感させる。

3m四方のフェンス内で、３枚羽根のプロペラが回転する。３台のサーチライトに照らされて、巨大な三つのプロペラの影が天井で回転する。（写真５）

写真５　プロペラ　フェンスとプロペラ、天井の影

第三室　BEACON

回転台上の２台のプロジェクターによる映像インスタレーション。映像は、会場内でのメイキング映像のプロジェクションマッピングから始まり、岐阜（問屋街）、沖縄（那覇、糸満、普天間）、福島（大熊町、富岡町）、そして再び岐阜の風景映像へと切り替わる。（約10回転、20分でループ）

観客は会場中央に座り、見回しながら映像を鑑賞する。（写真６，７，８）

写真６　BEACON

写真７　BEACON

写真８　BEACON

３　活動成果

岐阜県美術館では初めてと思われる空間全体を使った映像インスタレーション作品の展示となった。展示会場は、外光を採り入れた照明や絵画や彫刻展示を中心においたパーティションなど、近代的美術館としての空間設計によって成りたっている。このような会場を、今回の作品のような完全暗室を必要とする映像インスタレーションの展示室として使用するには、設営に多大の困難を要する。しかし今回のような展示ができたことは、少なくとも美術館の今後の展示の可能性を広げたと思われる。

「BEACON 2015」の展示期間中は、企画展示室での「藤田嗣治展」や戸外で行われた「アートまるケット展」と「BEACON 2015」の映像インスタレーションが併存することになり、観客にとって様々なアートのあり方を体感できたように思う。それらの展示やイベントの効果もあり、期間中、約3000人以上の市民によって鑑賞されたことは大きな成果である。

また今回の展示した作品は、これまでの「BEACON」の作品展示とは異なり、別形態の作品を加えて三部屋からなる構成をとることができ、今後の作品の可能性を見せたように思われる。また今回は特に沖縄や福島などの地域の問題を日常の生活の中でとらえ直すという試みに着手できたことは、現代のアートの試みに一石を投じたと考える。

来場者の反応・反響、批評家等の評価など

今回の映像インスタレーションの展示はこれまでの岐阜県美術館での展示ではあまり見られないものであり、今後の美術館展示に対する期待の声が多く聞かれた。反面、通常の絵画・彫刻の展示に慣れ親しんだ多くの人にとっては、これまでにない鑑賞方法や観客自身の想像力を要求するものでもあり、作品の展示だけでなく、鑑賞教育の必要性を感じた。

展示告知に関しては、ジャパンタイムズでの展示告知の掲載、中日新聞（岐阜近郊版、西濃版）での掲載がある。

批評としては、大久保美樹のWEB上でのテキスト（http://www.mrexhibition.net/wp_mimi/?p=4231）の他、芸術批評誌「REAR（リア）」で室井尚氏（横浜国大）の展評が掲載された。

岐阜おおがきビエンナーレ2015　—Cracks of Daily Life 日々の裂け目　　報告書（安藤）

岐阜県と大垣市の共催による「岐阜おおがきビエンナーレ」は、2004年から隔年5回に渡り、大垣市内各所での展示を中心として開催されてきた。今回のビエンナーレは、会場に本学拠点となるソピアホールを使い、前回2013年と同様、地域分散型ではない展示となった。これは運営側の人的規模の減少や総予算の縮小などの物理的側面もあるが、従来に比べ本学-地域間の産学連携事業が日常的に行われるようになっており、改めてアート展示の新たな試みとしての「ビエンナーレ」の意味を見いだすことが必要であると考えたことによる。その上で「文化的な」地域活性化が起こることが期待されるように覆われる。

１　開催概要
「岐阜おおがきビエンナーレ2015
Cracks of Daily Life 日々の裂け目」

ソフトピアジャパン・センタービル(3Fソピアホール)を会場とし、5日間のアートイベントを開催した。今回　のビエンナーレは、前回2013年の「LIFE to LIFE-生活から生命へ、生命から生活へ」を引き継ぎ、新たに「Cracks of Daily Life 日々の裂け目」というテーマを設け、日常の中に潜むさまざまな亀裂に焦点をあて参加作品を選択した。

また今回の特徴として、作品による会場構成やイベントなどのスケジューリングに工夫を凝らした。具体的には、インスタレーションやメディアアートなどジャンルを超えた展示作品による、会場に起伏をつけた立体的展示、またその会場が同時に映画上映やイベントの会場ともなる「劇場型展示空間」の構築を目指した。ある時間帯（昼）は会場全体が明るく展示作品が鑑賞でき、ある時間帯（夜）になると、会場が暗転し映画やイベントが始まる、会場全体が「何処にもない街」の風景や状況をかたちづくることになる。

会期：
2015年12月19日(土)~23日(水・祝) 11:00~19:00
内覧会・前夜祭 18日(金)17:00~19:00
（イベント開催時は展 示 鑑 賞 時 間 が 異なる）
（入場料 無料）
会場：
ソフトピアジャパン・センタービル(3F ソピアホール)
主催：情報科学芸術大学院大学[IAMAS]、岐阜県、大垣市
後援： 岐阜県教育委員会、大垣市教育委員会
協賛： 公益財団法人十六地域振興財団、OKB大垣共立銀行
協力：だるまジャパン合同会社、サンメッセ株式会社

２　全体テーマ
「Cracks of Daily Life 日々の裂け目」

いつもと同じように繰り返される日常の営み、しかし、そこには無数の傷があり、細かな亀裂が走っています。ある場合には、それは個々の内面の亀裂、不安や苦痛となって現れ、またある場合には、現代社会の様々な障害や問題として感じられもしています。あえてそれを意識しようがしまいが、それらは次第に増殖し、あるいは深くなっているように思われます。
アートはそれらの亀裂を「糧」としています。様々なメディアや手法を巧みに使い回しながら、ある者は、その亀裂を縫い合わせ、縁を綺麗に飾ることで、それを際立たせようとします。またある者は、それを押し広げたり、亀裂を自ら生み出そうとします。ある意味その行為はアーティストの日常そのものともいえるかもしれません。日々の裂け目、それは、決して日常を壊すものではなく、もしかすると「日常」というものの本来の姿なのでしょう。
（安藤）

３　展示概要

国内の招聘作家、IAMAS教員や卒業生による劇場型展示。会場内の段差をつけた緩やかな斜面には、大垣市内の特徴的な看板「Typogaki」が立ち並び、二つのステージ(台地)には、精妙に細工され　た書籍のオブジェやネット環境を作品背景としたモニター作品などが設置される。古紙を固めたブロックの塔、天井まで届くスクリーンにはは日用品の影が歪み動く。昇降する展示風景の俯瞰映像が正面の 巨大スクリーンに映し出され、展示作品全体が一つの会場で相互に関係し合い「何処にもない街」の風景をかたちづくる。

会場風景：（上）スクリーン方向（下）段差方向

【参加アーティスト / 展示】(50音順)
赤松 正行(技術協力: 小林 孝浩)
岡本 光博
クワクボリョウタ
ジェームズ・ギブソン(James Gibson)+ TAB
田尻 麻里子
田中 広幸
塚本 美奈
廣瀬 周士
福本 浩子
松井 茂
松島 俊介
八嶋 有司
IAMAS メディアサイト研究会
MM Lab.

（※作品概要・記録については後述）

4　イベント概要

イベントでは、前夜祭での、三輪眞弘(IAMAS)による音楽パフォーマンス作品「みんなが好きな給食のおまんじゅう」(中部地区初演)の上演を皮切りに、仙頭武則監督による沖縄をテーマにした問題作「NOTH-INGPART71」の特別映画上映、前田真二郎(IAMAS)の新作「日々”hibi”AUG2015」上映を行った。またアーティストトークやクロージングトークで今回の展示について語った。

■ 内覧会
日時　12月18 日(金)17:00 - 18:30
会場　SJC 3F ソピアホール

■前夜祭　-パフォーマンス「みんなが好きな給食のおまんじゅう」三輪眞弘(IAMAS)
赤松正行(IAMAS 教授)（※俯瞰映像担当）
日時　12月18 日(金)18:30 - 19:00
会場　SJC 3F ソピアホール

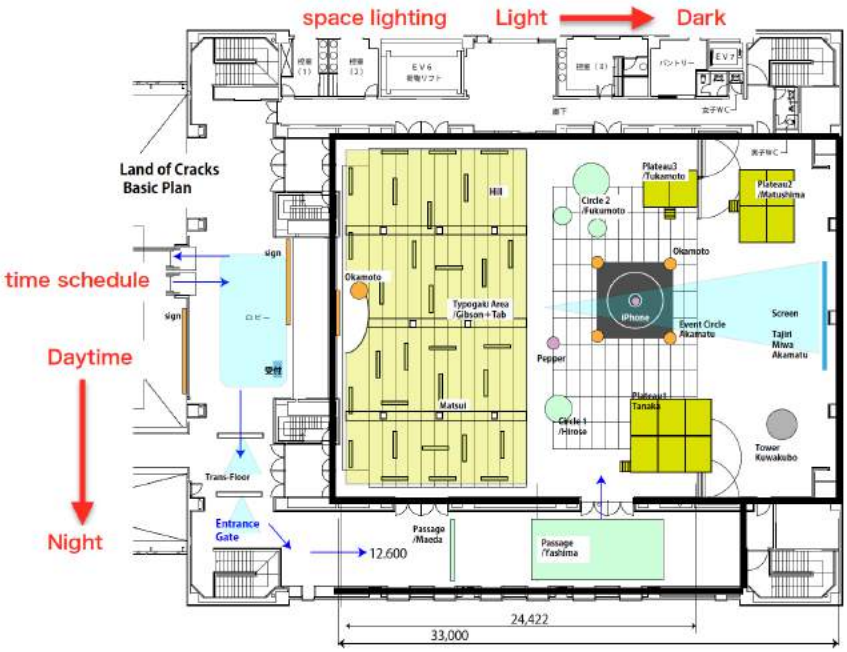
■オープニングセレモニー
日時 12月19日(土)11:00-11:30
会場　SJC 3F ソピアホール前

■ アーティストトーク
日時 12月19日(土)17:00 - 18:30
会場　SJC 3F ソピアホール

■特別映画上映　仙頭武則監督作品「NOTHING PARTS 71」+トークイベント　　仙頭武則(映画監督、映画プロデューサー、名古屋学芸大学）+前田真二郎
日時　12月20日(日)17:00 - 19:30
会場　SJC 3F ソピアホール

■ ライブ上映　前田真二郎監督作品「日々"hibi"AUG 2015」　前田真二郎(IAMAS)
日時　12月23日(水・祝)17:30 - 18:00
会場　SJC 3F ソピアホール

■ クロージングトーク
小林昌廣(IAMAS)＋松井茂(IAMAS)＋安藤泰彦
日時　12月23日(水・祝)18:30 - 19:00
会場　SJC 3F ソピアホール



会場プラン

5　展示作品記録

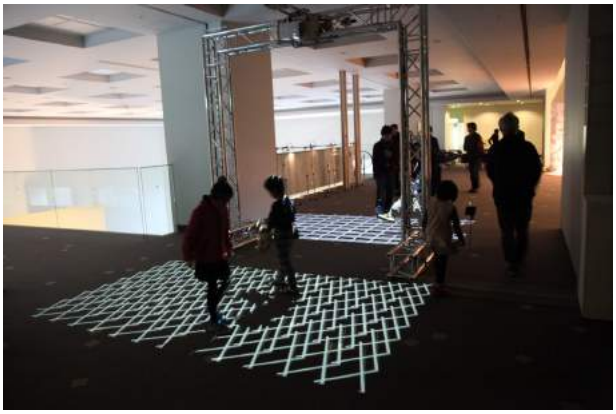
■ホール内会場構成

会場となるホールは劇場やコンサート会場にも使用されることがあり、段差をもった観客席のために床面が階段状にせり上がる構造を持っている。今回のビエンナーレではその構造を利用し、会場床面の約半分にゆるやかな段差をつけ（段差10cm、13段）、一種の「丘」とみなして作品を設置している。また劇場用移動ステージを利用し、会場に独立する二つの展示用ステージ（高さ80cm、昇降用階段付）を「台地」に見立てて設置した。これらの設営は、平坦なホール会場に高低をつけ、会場全体を起伏のある地形とすることで、観客の鑑賞行為そのものを、どこかの町を歩く散策体験と重ね合わせるためになされている。鑑賞者は個々の作品を独立したものとして単一視点から見るだけでなく、会場内を歩き周り、登り、下り、回り込んで作品を見ることになる。必然的に一つの作品は、別の作品を背景とし、あるいは前景とする。会場内を歩き回り、（文字どおりに）「ステージに登って」作品を見る他の鑑賞者の姿も目に入ることになる。

【通路部分】
受付から、会場となるホールに入るための導入部であると共に、壁面のある通路状の建築構造を生かした作品を配置した。

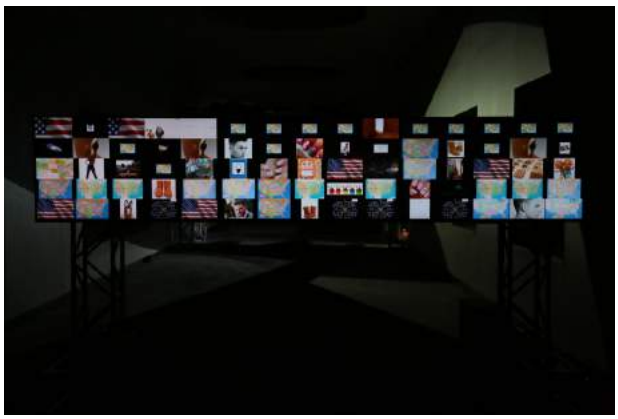
■トランス・フロア2
—IAMASメディアサイト研究会

IAMASメディアサイト研究会は、2014年、公共空間（大垣駅南北自由通路）でのメディア作品の設置の依頼を受けて、学生を中心として発足した研究会である。入り口に門状のトラスが立てられ、その下を歩く訪問者に反応して変化する数種類の映像が床に投影された。
ゲートとして会場への入り口を示すと同時に、石蹴りなど、かつての路上での遊びを彷彿させる遊び場ともなった。



■A to Z [images on the network]
—MM.Lab

真下武久（1979年生まれ）と前田真二郎（1969年生まれ）によるアート・ユニットによるメディアアート作品。通路を塞ぐように三面の巨大液晶モニター設置されている。画面は、７５カ国の検索エンジンの検索窓へAからZまで一文字ずつ文字入力することにより、最初に検索された画像で構成されている。１秒おきに変化する映像は、それぞれの国で最も流通しているイメージを示し、国民性の違いや共通性だけでなく、ネットという場の限界性も感じさせた。



■The Dive – Methods to trace a city
—八嶋有司

ホールに続く通路の壁面、天井、床に6台のプロジェクターからの映像が投影される。それぞれの映像は作者自身の身体に6台のカメラを取りつけ（両手首、両足首、額、後頭部）歩きながら風景を同時に記録したものである。観客は歩行する作者の身体と重なるように映像と音響（足音や心臓音）に取り囲まれる。作品は「統一された世界と身体の感覚を解体し、自分を中心とする世界の様相に裂け目をあたえ（作者）」ようとする。

【ホール、床部分（平地・台地）】

■roots
　廣瀬周士

ホールに入ると床に土が盛られた数個の円形サークルがあり、その上に土で固められた足のオブジェが、まるでその土から生えているように数体並んでいる。足の断面からは雑草が伸びている。岐阜市内の各所の土とその土で作られた足、そしてそこに生えていた雑草が、新たに「土-足-植物」のコロニーを形作る。舗装された都市の路上、その裂け目から垣間見える土は、私たちを既にその分解・再生という循環の中に組み込んでいる。「僕は地面と繋がった。それは風や雨や光とも繋がることを意味していた。」（作者）

■ノイズ＋ 木立の向こうの言語標本
田中広幸

ホールに設置された高さ80cmほどの台地状のステージの一つに、田中広幸の二種類の作品が設置された。一つは６台の古机の上に広げられた『木立の向こうの言語標本』(2011年)であり、もう一つは舞台の床に置かれた３０数冊の『ノイズ＋』(2009年)である。「『ノイズ＋』(2009年)は、古書のページを線香で焼いて虫食いのようにし、一部に他の古書からの文字を移植した作品で、『木立の向こうの言語標本』(2011年)は、古書の50ページぶんの文字列を、一部を残して切り落とし、残った行間を樹木に見立てて彩色したものである。 いずれの作品も、意味伝達の局面において、けっして透明ではありえない「媒体」「メディア」としての文字の属性が、私たちの深層に及ぼすだろう避けがたいノイズをテーマとした。」（作者）

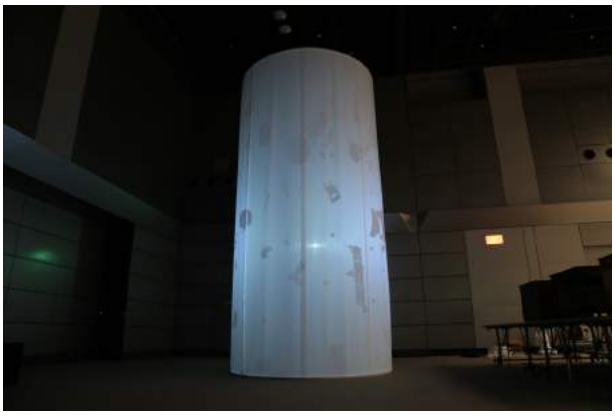
■La Biblioteca-バベルの図書館-
福本浩子

高さ3m近くある遺跡を思わせる円筒状の塔が目につく。その塔は、身の回りの印刷物を細かく砕き撹拌しブロック状に整形したものを数百個積み上げてできている。近づいて見るとブロックの塊の中に切れ切れの言葉の断片が見える。「タイトルとなっている「バベルの図書館」とは、ボルヘスの小説に登場する、無限の本を収蔵する図書館のことである。もともと本として持っていた情報があらたな情報を持つ構築物となる」と作者は語る。今回の展示では、様々な理由で発禁処分となっった書物を材料とした二種類のオブジェ—外部からのその一部を聴き取ることのできるブロック状に固められもの、開いた頁からキノコが生えるオブジェも展示された。これら福本のアプローチは、書物の内部（頁と文字列の解体と再生）へと向かう田中広幸の眼差しとは対照的に、書物の外側からの眼差し（読めない書物としてのブロックや発禁本）と言えるかもしれない。

■Gift
クワクボリョウタ

福本の古書でできた塔と相対するように、高さ8m、３m径の巨大な円筒状のオブジェが設置される。円筒の周囲の布には様々な日常品の影が浮かび、ゆっくりと回転しながら上昇する。円筒の内部には数十個の安価な小さい玩具模型が吊されており、光源を上下させることで、その影の上昇・下降の効果を生み出している。それは一見すると楽しげな巨大なツリーにも見えるが、竜巻を想像させる不穏な雰囲気併せ持っている。「冬の或る晩。大きな竜巻が起きて、物という物が全て宙に巻き上げられてしまいました。僕の物も。君の物も。すべての人か

ら。すべての家から。すべての国から。地上には、人間だけが残されました。そしてただ空の光景をぼーっと眺めるしかありませんでした。」(作者)



■images.jpgシリーズ
塚本美奈

三台のボックス上それぞれにモニターが設置され、約４分の三種類の映像が流され、ヘッドフォンで音声が聞き取れる。それらはネット上の画像イメージや言葉を検索・収集し、あらたに編集された映像作品である。故郷を思い浮かべて紡ぎ出されるかのような言葉や画像は、特定の個人の記憶を離れ「思い出」そのものの集合的なイメージを生み出している。それは見る者それぞれに、どこかで見たような、あるいは聞いたような既視感のある状況を呼び起こす。

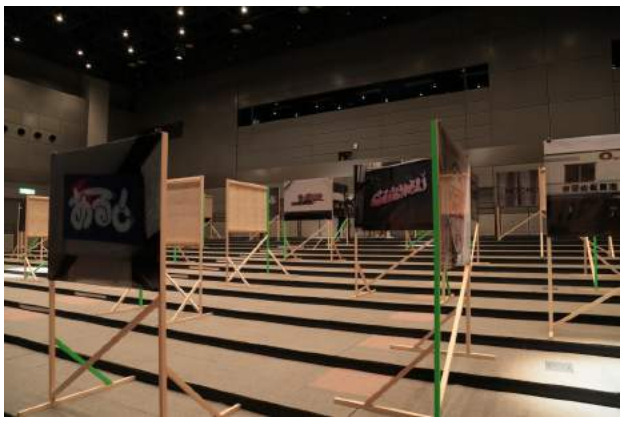
■VOICE-PORTRAIT Remix2015
松島俊介

会場の奥、もう一つのステージ（台地）に松島俊介の作品が設置された。11台のモニターが円形に配置され、それぞれに作者自身の「自己紹介動画」が流れている。しかしよく見ると少し奇妙である。同じ人物が別の声（女性の声も）で話をしている。実は、そこで話されている内容やその声—そして身振り—は、インターネット上の「自己紹介動画」から取られたものであり、作者はそれを模倣（所謂「口パク」）しているのである。もはや誰のものでもない「匿名的な自己紹介(?)」といった状況が生まれている。塚本美奈の誰のものでもない「思い出」と別の形態で響きあっている。

【ホール、段差部分（丘）】

■Typogaki
TAB + ジェームズ・ギブソン

会場ホールの約半分を占める段差をもった床上（「丘」）に、TAB ＋ ジェームズ・ギブソンによる「Typogaki」が設置された。「Typogaki」は、「Typography」と「Ogaki」を組み合わせた造語である。大垣で撮られた様々な看板の写真が、３０体の「立て看板」状の形態で構成されている。ある意味でそれは、大垣の町の風景を再構成し、展覧会の会場という別の空間内に移し替えたものである。超時間的で均一化するタイポグラフではなく、時間的な推移や歴史的（文化的・経済的・政治的）状況の反映としての古い看板の持つ価値を再考するものである。段差を昇りまた下りながら、展示された看板を見る体験は、時間的逆行体験の様相を帯びることになる。（段の上部がより古い看板となっている）



■量子詩（それを基にしたオブジェ）
松井茂（＋企画者）

「量子詩」は、作者自身の別の詩作品「純粋詩」の執筆行数と、『毎日新聞』朝刊の「お天気」欄から、東京地方の「きょう」を含む4日間分の最高予想気温と最低予想気温の引用が併記された、5日分のテキスト作品である。2002年に制作が開始され、2002年3月11日から5日毎にメール配信がなされている。
今回の展示では、この「量子詩」を企画者側がオブジェ化し展示した。段差のある「丘」の両サイドに計6台の書架台を置き、それぞれの台からこの「量子詩」の頁が蛇腹状に上空に伸びる。「量子詩」512番から1014番まで、総計約500頁（2500日）が使われた。作者の詩作行為の記録でもあるこの作品は、繰り返される日々そのものの記録でもあり、展示空間に垂直に交叉する時間の経過を指し示している。

■LIFEjacket シリーズ／モレシャン、他
岡本光博

段差のある「丘」の最上段に、黒く膨らんだ汚染廃棄物の体を持つマネキン人形（「モレシャン / LIFE jacket 5」）が立ち、ホールを見下ろしている。その背後の壁には、福島県富岡町で撮影された「彼の大勢の仲間たち」（モレシャンズ）の大きな写真が手すりで隠されるように展示されている。これらの作品は作者の「LIFE jacket」シリーズの一つで、汚染物質が「漏れる」はずがない安全な廃棄物袋（ライフジャケット）を皮肉るとともに、今後次第に増殖するであろうモレシャン達を通して現代の日本の社会状況を暗示している。

【ホール、中央広場】

ホールの中央には、イベント用の広場であることを示す、約5.5m四方のパネルが敷かれている。これは前夜祭で行われた三輪眞弘によるパフォーマンス作品「みんなが好きな給食のおまんじゅう」のためのパフォーマンス用マットであると同時に、赤松正行他の作品「Time and Space Machine!」の映像素材ともなっている。

■LIFEjacket 1ー4
岡本光博

「モレシャン」以外のライフジャケット（「LIFEjacket 1ー4」）は、衣服展示であるかのように、ホール中央の「広場」の周辺に配置された。

各国の生命保険会社のロゴが服地の模様となっているジャケット、日本の生命保険会社の—何故かどれもが子ども向けで可愛らしい—マスコットキャラクターで埋め尽くされたジャケット（TVCM付き）、そしてこれらの社会風刺的要素からは距離をとっているかにみえる—それ故に最も効果的であるように見える—作者自身の守護神がレイアウトされたジャケットなどである。

■Time and Space Machine!
赤松正行（技術協力：小林孝浩、企画者）

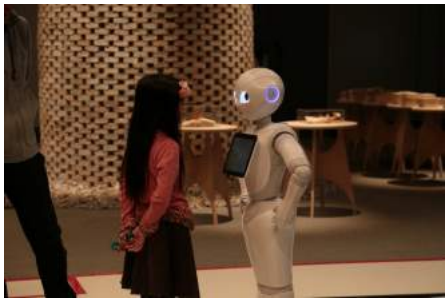
床上パネルの中央部分、高さ9mの天井トラスから吊り下げられたiPhoneがゆっくりと上下昇降を繰り返している。そのiPhoneで撮影された俯瞰映像がリアルタイムで遅延処理を受け、マトリックス状の画像としてホール正面の巨大スクリーンに投影される。取得される画像はiPhoneの高低によって変わるため、映し出される画像もまた複雑に変化する。
同じシステムが、前夜祭での三輪眞弘によるパフォーマンス作品「みんなが好きな給食のおまんじゅう」にも使用され。パフォーマンス鑑賞の視点の複数化に寄与した。

■ありふれた時間
田尻麻里子

作品展示の時間帯は、ホール正面のスクリーンに、赤松の「Time and Space Machine!」の映像と共に、田尻麻里子の「ありふれた時間」（約６分）が流された。裸足で卵の殻を踏むという単純な行為が様々な場所で繰り返される。日常の中のありふれた動作が「クシャッ」という殻の砕ける音とともに微妙な快感や緊張感を伝えている。スクリーンに映された巨大な足や卵はホール内のどの位置からも見え、ある種ビルの広告映像のような機能を果たした。

■Pepperによる作品解説
篠田

床上パネル上にヒト型ロボット（Pepper）が置かれ、観客の要望によって、動作を交えた簡単な作品解説を行った。
ある種の性格が付与できるヒト型ロボットによる説明は、企画者側の客観的なともすれば押しつけともなる作品解説というよりも、一風変わった観客からの感想といった、特にあらたまらず気軽に話しを聞ける雰囲気をもっていた。



６　イベント記録

今回のビエンナーレでは、時間帯を定めて会場となるホールがそのままイベント会場とする仕組みをとった。

■前夜祭
-パフォーマンス「みんなが好きな給食のおまんじゅう」
三輪眞弘　　赤松正行（※俯瞰映像担当）
日時　12月18 日(金)18:30 - 19:00
会場　SJC 3F ソピアホール

ホール中央の「広場」、床に敷かれたプレート上でのパフォーマンスとなった。観客は階段状の「丘」に腰を下ろして鑑賞した。正面のスクリーンには天井からの俯瞰映像が投影された。

■ アーティストトーク
日時 12月19日(土)17:00 - 18:30
会場 SJC 3F ソピアホール

■特別映画上映
仙頭武則監督作品「NOTHING PARTS 71」
+トークイベント
仙頭武則(映画監督、映画プロデューサー、名古屋学芸大学)
+前田真二郎
日時 12月20日(日)17:00 - 19:30
会場 SJC 3F ソピアホール

■IAMAS特別公開授業
「ストリート・アート—メディア考古学の視点から—」
"Art in the Streets - a Media Archaeological Perspective"

会場：SJC 3F ソピアホール
出演：エルキ・フータモ（UCLA教授）
司会・通訳：吉岡洋（京都大学教授）

■ ライブ上映 前田真二郎監督作品「日々"hibi"AUG 2015」 前田真二郎(IAMAS)
日時 12月23日(水・祝)17:30 - 18:00
会場 SJC 3F ソピアホール

■ クロージングトーク
小林昌廣(IAMAS)＋松井茂(IAMAS)＋安藤泰彦
日時 12月23日(水・祝)18:30 - 19:00
会場 SJC 3F ソピアホール